

研究ノート

日本とフランスを結びつけた  
 かった女性 キク・ヤマタ

田口 亜紀

長年、西洋にとって日本は遠い国であった。十九世紀まで直接交渉がなかったため、西洋では伝聞で得た情報からフィクションが膨らんでいき、日本は憧れの国になった。中世フランス語で書かれた『東方見聞録』(マルコ・ポーロ)は日本に関する唯一の情報源だったが、そこで紹介された黄金郷・日本を採り求めて、コロンブスが航海に乗り出したことは、その最たる例だろう。十六世紀には来日したイエズス会士がヴァチカ

ンに送った書簡から、日本人は有徳であることが伝えられ、十七世紀から十九世紀までのヨーロッパにおける日本観が形成された。鎖国で閉ざされた日本は、外から見ると「ミステリアスな存在」になった。日本の開国後、西洋人が来日者の嗜好に沿ったかたちで、『芸者の生涯』のような著作を残しながらも、女性が輝く国、「女王の国」・日本というイメージを定着させようとした日本人女性がいた。キク・ヤマタである。一八九七年に日本人の父と

フランス人の母の間に生まれたキクは、十一歳になるまで住んでいたパリから、東京に移り、聖心女子学院で教育を受けた。その後AP東京支局での勤務を経て、二十六歳でフランスに渡り、文壇デビューを果たした。パリではキクは常に和装姿で現れ、生け花を披露し、文化交流の場で通訳を務め、日本に関する文章を発表した、真の文化大使だった。日本では女性が文化を担っていて、古来より女性性は日本文化の形成と伝統の維持に大きな役割を果たしてきた、とキクは主張した。しかし、満州事変を契機に皇国史観が強調される時勢で、大日本帝国がそのような考えを見逃すはずはない。太平洋戦争下、キクが滞在していた日本で憲兵

から受けた仕打ちは想像に難くない。一昨年、フランスにおける日本女性の表象についての原稿を依頼された時、キクを取り上げようと思っ、彼女の原稿が収蔵されているジュネーブ州立図書館に調査旅行に出かけた。なぜジュネーブの図書館に原稿があるかというと、スイス人画家コンラッド・メイリと結婚し、ジュネーブ近郊に住んでいたキクの遺志で、原稿、文書、書簡類の一切がここに寄託されたからだ。特別許可を得て十八個のケースに整理され

た所蔵品にふれていたら、未完の自伝、留置所での体験を記したメモ、そして日記から、日本とフランスを愛し、二つの祖国に引き裂かれた一人の女性が立ち現れてきた。手稿のインクが滲んでいたりと、筆跡が乱れていたりと、肉筆はそれ自体で物語っていたのだ。

※本誌二面「研究紀行」欄の拙稿参照(たぐち あき 准教授・フランス文学)



「キク・ヤマタと夫コンラッド・メイリ」(キクが切り抜いて持っていた新聞記事より)